



静

動

かまくら

横手は雪国の中でも有数の豪雪地帯です。この横手で2月15日、16日に開催される「かまくら」は、雪室の中に神座を設けて水神様を祀り、中で子どもたちが甘酒を飲んだりお餅を焼いたりして遊ぶ民俗行事で、およそ400年の歴史があります。

藩政の頃、武家の住んでいる内町では、旧暦1月14日の夜、四角い雪の壁を作り、その中に門松やしめ縄などを入れ、お神酒や餅を供えてから燃やし、災難を除き子どもの無事成長を祈った左義長のかまくらを作り、鎌倉大明神を祀っていました。一方、商人の住んでいる外町では、町内の井戸のそばに雪穴を作り、水神様(おしずの神さん)を祀り、良い水に恵まれるようにと祈りました。これに、当時から子どもたちの遊びの中にあつた雪遊びが混ざり、さまざまな変遷を経て、現在の「かまくら」になつたと伝えられています。



雪まつりの開催される2月15日あたりは、冬の頂点とも言うべき寒さの厳しい時期で、天候はなかなか定まりません。荒れすさぶ吹雪の夜、しんしんと降り積もる大雪の夜、寒月冴える晴れた夜など、かまくらはその時々、情趣が異なります。世代を越えて受け継がれてきた「かまくら」は、横手人の気質と日々の生活、そして気候風土が生んだ雪国の伝統文化なのです。



かまくらの大きさや形は、その時代背景とともに姿を変え、現在は直径3.5メートル、高さ約3メートルの大きさのものがほとんどです。

ぼんでん

「ぼんでん」とは、幣束(神祭用具のひとつ)のことです。五穀豊穡、家内安全、商売繁盛など、さまざまな願いが込められ、毎年2月17日に旭岡山神社に奉納される神事です。

「よこてのぼんでん」は、なんとと言っても他に類を見ないほどの大きさ、優美さ、そして豪華さが特徴です。竿の長さは、およそ4.3メートル(二丈四尺五寸)。その先に直径90センチ(三尺)の円筒形の竹かごを取り付け、色鮮やかな「さがり」(友禅・絹・羽二重などの布地、麻糸を垂らします。さらに、しめ縄や御幣、鉢巻を取り付け、頭の上在意匠をこらした頭飾りをつけます。頭飾りが取り付けられると、その大きさは5メートルを優に超え、その重さは30キロにもなります。



ぼんでんコンクール (2月16日 午前9時30分)

毎年、奉納の前日である2月16日の午前中に横手地域局前おまつり広場で、このぼんでんの出来栄を競う「ぼんでんコンクール」が開催されます。当日は、秋田県知事賞である「特選」を目指し、豪華絢爛なぼんでんが市内各所から40本ほど集まります。恵比寿俵や子どもたちの作った小若ぼんでんとあいまつて、会場は大きな盛り上がりを見せます。年々、訪れる観光客の皆さんの数も多くなり、「よこてのぼんでん」の魅力が全国に広がりを見せています。

ぼんでんコンクール審査基準

着想、美点、技術のそれぞれの面からみて、さらにそれらを総合的に審査します。

- 1 着想：頭飾り及び本体のそれぞれのアイディア等についてどうか。
- 2 美点：本体の鉢巻、ぼっち、さがりの配色及び頭飾りの色彩、全体的な色彩バランスはどうか。
- 3 技術：頭飾りの製作技術、本体については、鉢巻のしめ具合、ぼっち、さがりの飾り付け具合等、製作技術はどうか。
- 4 総合：総体のバランス、人手で持てる重さが基準。審査員は、各項目5点の20点満点(4項目)で点数をつけます。そして審査員10人全員の合計点数によって、各賞が決定します。皆さんも、この審査基準を見ながら、ぼんでんコンクールをお楽しみください。



ぼんでん奉納 (2月17日 午前10時)

2月17日のぼんでん奉納当日は、横手地域局前おまつり広場で午前9時30分から出陣式が開催されます。午前10時を過ぎると、花火の合図で一斉にぼんでんが動き始め、奉納する旭岡山神社(約3キロメートル先・右地図)までの先陣争いが始まります。若衆たちは「ジヨヤサ! ジヨヤサ!」の掛け声、そしてぼんでん唄を唄いながら旭岡山神社を目指します。

そして旭岡山神社の参道を駆け上り、本殿に到着すると、さらに掛け声が大きくなり、激しい押し合いともみ合いがはじまります。本殿を目がけて、ぼんでんが勢いよく若衆もろとも突っ込み、それを阻止しようとする者たち両者が入り乱れ、その熱気であたりは湯気が立ちこめるほどです。

「ぼんでんが終われば、春がくる…」長い冬を耐えている横手の人たちにとって、このぼんでんという行事は、春を呼び込む行事でもあるのです。

